

「野生生物と社会」学会青年部会企画

『他分野のアプローチに触れる若手研究座談会－野生動物管理の学際的議論にむけて－』

企画スタッフコメント：他分野の方法論に触れて

2023/4/27

北里大学獣医学部生物環境科学科 4 年

木村開人

1. はじめに

本稿では、2023 年 3 月 4 日に開催された「野生生物と社会」学会青年部会企画の「他分野のアプローチに触れる若手研究懇親会－野生動物管理の学際的議論に向けて－」にて行われた講演内容と、企画スタッフとして参加した筆者の考える今後の展望に関して報告する。

1990 年代以降、日本では野生動物の分布拡大とともに人間との軋轢が増加し社会問題化している。近年の問題の顕在化とその解決に対する社会的需要の高まりを受けて、国および地方自治体は野生動物の管理を強化してきた(角田, 2019)。

この野生動物管理は後述の通り、生息地、野生動物、被害防除の 3 つの次元からなるものとして描かれており、実践に際して河田(2014)は、生態学、獣医学などの自然科学的アプローチと、社会学、経済学などの社会科学的アプローチの双方が不可欠であるとしている。その一方で、Decker(2012)ではこれまでは野生動物と生息地に注意が払われてきたと述べられている。これは人間のかかわる被害防除が他 2 つと比べて意識されていないことが示唆されていると考える。また日本では鈴木(2015)より、これまでは野生動物による被害の低減手法やその普及論が目立たなかったとの指摘がされている。このような課題には利害関係者の認識や政策選好の抽出、それらの政策への影響を知るといった社会科学的な手法で対応できると考える。詳細は後述するが、当報告での質的研究や政策過程分析がこれに該当する。

以上のような背景から、自然科学と社会科学のそれぞれの分野の強みを知ることによってギャップを埋め、相互理解を進展させることを目的としたのが本企画である。なお、筆者自身の立ち位置は生態学者であるが、知見の社会実装にも興味があり、本企画を心待ちにしていた。

以下より報告内容を概説し、筆者の考える 2 つの重要なポイントについて意見を述べたい。

2. 講演内容

2-1. Wildlife Management の概要

企画の初めに稲穂氏から Wildlife Management についての概説がされた。その中で

Wildlife Management とは、アジェンダ設定を行いつつ、科学的根拠と社会的な条件に基づいた多様な利害関係者との合意形成により、野生動物に関連する目標や計画を策定すること、生息地管理と個体数管理、Human Dimensions を含めた被害防除の 3 つを組み合わせることで順応的に管理をしていく科学や技術の体系であると定義づけた。この定義は現行の野生動物管理論では想定されていない段階であるアジェンダ設定プロセスが新たに知見として取り込まれた点が特徴的であり、理論と社会実装の間を近づけるものであると考える。

2-2. 野生動物管理と各分野の理論や方法論についての講演

はじめに稲穂氏から生態学が果たす Evidence Based Policy Making (EBPM) への貢献についての講演があった。EBPM とはエビデンスに基づく政策決定のことで、エビデンスには科学的証拠や土着の知識、人々の経験などが含まれる。これによってコストパフォーマンスの向上や、施策実行に科学的正当性を与えるとした。デメリットとしては対策が後手に回ってしまうことやコストが挙げられた。またリスの食性の生理学的な研究や、メタ個体群における各パッチの重要性が調べられた研究を紹介しており、生態学は生理生態学のミクロな視点から群衆生態学のマクロな視点まで、幅広いアプローチで野生動物管理に携われることを強調していた。

続いて遠藤氏よりゲノム解析についての講演があった。ゲノム解析を用いた野生動物研究では、環境 DNA や集団ゲノミクス、食性分析などの方法論があるとし、これらの手法は野生動物管理にも用いることができると述べた。その際、古代のゲノムを用いたカカポの個体群管理が事例として紹介された。ただしこれらのいずれも適切な課題設定やコミュニケーションが重要であり、それらを踏まえたうえで最適な手法を選ぶべきだとまとめている。

自然科学分野の最後には石黒氏によって「獣医学から向き合う野生動物管理」と題する報告がされた。獣医学は解剖学から治療まで、動物の個体に関わる幅広い分野を領域としている。これを踏まえ、獣医学は感染症対策的側面での貢献や、ヒトへのリスクの側面から野生動物管理の必要性を訴えることができるとした。また、方法論として繁殖状態の評価や、組織切片の作成によって野生動物の繁殖状態を加味した対策が可能ではないかとしている。

続いて社会科学分野から、高畑氏より野生動物管理における質的研究の貢献についての講演があった。この中で高畑氏は質的研究が量的研究とは異なる研究手法であり、量的研究に比べると一般化が難しい代わりに個々の事例における現象の解像度を高められることが特徴であると示された。講演ではリスへの餌付け問題を事例として、市民の餌付けの動機を明らかにできたことを説明していた。

講演の最後には古賀氏より政策過程分析についての講演があった。政策過程分析とは政策の手段やデザインでなくそのプロセスに着目する研究だとし、狩猟制度を取り巻いた動きやニホンジカ・イノシシ半減政策を事例として手法の紹介をした。また政策に問題があ

る場合は政策過程に問題があることが多いため、現状の野生動物政策の過程を理解することで健全化を進められるとして講演を締めた。

2-3. パネルディスカッションと質疑応答

講演後は演者5人と総合司会によるパネルディスカッションが開催された。ディスカッションでは「他分野連携」と「若手研究」をキーワードとして、それぞれの分野と野生動物管理の関わり、また若手研究者がどのように研究する力を養っていくかについて議論が交わされた。議論中は専門分野の勉強の仕方や研究室の選び方についても話が展開され、質疑応答では学部生からもその点について質問が多くされていた。

2-4. 講演の感想

生態学や獣医学といった自然科学分野は筆者に身近であり、方法論も聞きなじみのあるものが多かった。特に行動観察の事例は自身の卒業研究と重なる部分であったと同時に、自身の研究と野生動物管理のつながりが見えたように感じ、身の引き締まる思いであった。加えて、自分野の研究をエビデンスの一部として社会実装につなげる EBPM という考えは、自身の研究で手いっぱいである筆者にとって目新しいものであった。

また、筆者はこれまで社会科学分野の方法論について学んだことがなく、今回の講演はとて新鮮であった。特に本企画で説明のあった質的研究は自然科学分野で紹介されていた事例とは対照的に感じ、強く記憶に残っている。筆者自身は生態学者であり、サンプル数や再現性があるか等の基準で（その研究の）有用性を判断しかねない。一方で質的研究などの方法論は、個別の例を深く追求して深い意味を見出そうとする。量的なデータを扱い、再現性や数値化を対象とする自然科学分野との違いはとて印象的であった。

3. 他分野との相互理解について

以下では筆者の意見を述べるが、本節では学際的議論における他分野との相互理解の重要性について記述したい。

野生動物との軋轢の問題を解決するためには生態学的側面から社会的側面まで理解する必要がある(桜井, 2014)との指摘がある通り、野生動物管理には学際的議論が重要と考える。そのためには各研究で用いられた手法の認識論を把握することが有用ではないだろうか。例えば竹内(1980)では、社会科学分野で取り上げられる問題は方法論上の立場の相違が研究内容に大きく影響する特徴があるとの指摘がされている。また、大谷(2017)では、量的研究と質的研究の依拠する認識論は異なっており、個々の研究がどの程度実証的でどの程度解釈的なものであるのか見定めるのが重要と述べられている。したがって、野生動物管理のように学際的な分野、もしくは分野横断的に研究する際にはその方法論がどのように事象を捉えているか、手法の認識論を踏まえたうえで取り組む必要があると考える。しかし、鈴木(2015)のように管理政策に被害認識が取り込まれていないなど、限定されたアプローチ

による対策がされている現状もあり、相互理解が深まっているとは考えにくい。そのため今後は本企画のような相互理解を深める場によって他分野の手法を知り、自分たちにはない強みと捉えて組み合わせることで、野生動物管理を多様な認識論に基づいた学問に進展させることが必要と考える。

またそれによって現場に即した対策が立てやすくなると考える。例えばEBPMに基づいた管理においては計画策定段階にエビデンスを集めることが重要である。これには定量的に評価できる数値的データと、現地の知識、経験、地域住民の意識など解像度の高い質的なデータの両方求められる。このように、自然科学者と社会科学者が両者の知見を相互に補完して計画の策定、実行を進めることで軋轢解消に有用な社会実装が可能になるのではないかと考える。

4. 動物観のもたらす影響について

以下では、野生動物管理における動物観と筆者の関心のある動物愛護思想を交えて意見を述べたい。筆者の野生動物管理に興味を持ったルーツは動物愛護の経験にある。中学、高校で殺処分問題を知り、先日までは学内の動物愛護サークルにて代表として地域の問題解決に取り組んでいた。殺処分問題を知った当初は気持ちが先行し、感情的な面が強かったものの、ペットの遺棄を含む外来種問題を知ったことでペットの飼育には管理が不可欠であると考えようになり、生態学や管理に興味を持った。また、哺乳類の管理政策に伴っては反対運動が展開されることもあり、野生動物問題における人間的側面にも関心を抱いた。このような経験から生態学に携わりつつも社会実装や政策決定プロセスにも興味があり、質的研究や政策過程論が重要と思ったのは上記の経験によるところが大きい。

日本人の動物愛護は、馬への虐待が問題視され始めた明治 30 年代が淵源とされている(近森, 2000)。当時は博愛主義の実践を見せつけにより階級の負い目を隠そうとした上・中流階級に支持されたものであったが、現在では一般市民等による愛護団体の設立も見られ、広く普及してきていると考えられる。

動物愛護思想の特徴として、岩田(1993)は動物愛護の最終的目標を、良心の満足、動物個体の幸福であると分類している。さらに、則久(2018)では、動物愛護は自分の満足したいことをやってあげるという一面があるのではないかと指摘がある。

また、日本人の動物に対する態度の特徴として、高柳(1992)では、動物を心理的・情緒的にみる傾向が強く、動物に対する客観的・論理的態度は相対的に少ないということが述べられた。加えて Kellert(1974)では、倫理や生態学的な重要性にもとづいて自然を管理することに消極的であることが示されている。つまり、日本人は動物に対して情緒的な態度を取りやすく、生態学に基づいた管理には消極的である可能性が示唆された。

以上のことより、日本人の動物観と動物愛護思想は似通ったところがあると考えられる。そしてこれらの考えは、個体群や種といったスケールで、科学的な観点から進められる野生動物管理の概念と対照的であることが見て取れる。さらに、Zinn(1997)では、保護主義的な野生

生物価値観を持つ人は、利用主義的な野生生物価値観を持つ人よりも、動物を破壊することを受け入れたがらないことが明らかにされた。この結果から Zinn は、特定の管理政策をめぐって激しい対立が生じやすい状況を示しているとした。実際に筆者も動物愛護論者による反対活動を目にしたことがあり、懸念は強ち間違いでもないと感じる。しかしながら、軋轢解消には野生動物管理が欠かせないため、管理に際しては関係者の動物観の把握が必要と考える。

特に、研究者の考える動物観と利害関係者の動物観が一致するとは限らない。固定観念ではなく、彼らがその事例に対してどのような考えを持っているかを解釈学的なアプローチで捉えることで、人間同士の軋轢解消につながるのではないだろうか。加えて、野生動物管理に対しての市民感情の悪化を避けるためにも、野生動物管理の考え方や方向性を理解してもらえよう、相互理解を図ることも効率的な対策につながる一つの手と考える。

5. まとめ

今までは他分野の方法論はおろか、何をしているかすらよく知らないまま野生動物管理には社会科学が必要であると漠然とした考えを持っていた。しかし社会科学分野が何をできるのか、どのようなアプローチを取るのかも知らないまま言っていたことに気づかされた。今回の企画で参加者はお互いの分野の一端を垣間見たように思う。普段触れることのない分野が同じ野生動物管理の枠組みの中で何をしているか、聞く機会は少ないのではないだろうか。その意味で、他分野の方法論を知れたのはとても貴重な機会であったように感じる。

以上を踏まえ、野生動物管理を取り巻く課題を多面的に理解し、関連する分野の方法論を知ることは、有効な対策検討への一歩と考える。今回は相互理解が目的だったためお互いの紹介にとどまったが、ゆくゆくは学際的な研究の発展につながることを期待したい。

引用文献

岩田隆太郎, 1993, 森林保護, 自然保護, 環境保護, …… —アンティテーゼか類概念か?—, 森林科学, 13(1), 9-14

大谷尚, 2017, 質的研究とは何か, YAKUGAKU ZASSHI, 137(6), 653-658

河田幸視, 2014, 野生動物管理における人的側面—被害算定における問題点—, 7(1), 48-50

桜井良, 2010, ヒューマン・ディメンションとは何か: 野生動物管理における社会科学的アプローチの芽生えとその発展について, ワイルドライフ・フォーラム, 14(34), 16-21

桜井良, 2014, 社会心理学理論を基にした野生動物に対する住民意識調査の実施とその検証—計画的行動理論と野生動物に対する人々の許容性モデルの応用事例—, 哺乳類科学, 54(2), 219-230

東海林克彦, 2008, 日本人の動物観と狩猟の動向に関する考察, 日本野生動物医学会誌,

13(1), 9-14

鈴木克哉, 2015, 野生動物との軋轢はどのように解消できるか? ——地域住民の被害認識と獣害の問題化プロセス——, 環境社会学研究, 14, 55-69

高柳敦, 1992, 日本人の動物に対する態度の特性について, 55(5), 25-30

竹内啓, 1980, 社会科学方法論をめぐる現状について, 科学哲学, 13, 35-48

近森高明, 2000, 動物愛護の〈起源〉: 明治三〇年代における苦痛への配慮と動物愛護運動, 京都社会学年報: KJS, 8, 81-96

角田裕志, 2019, 人口減少が進んだ社会に適応可能な野生動物管理を模索する, 日本生態学会誌, 69(1), 37-44

Daniel J. Decker, Daniel A. B. Rail, Len H. Carpenter, Jhon F. Organ & Tania M. Schusler (2005) Collaboration for community-based wildlife management 8, 227-236

Daniel J. Decker, Shawn J. Riley & William F. Siemer (2012) *Human Dimensions of Wildlife Management*. JHU Press

Kellert, S.R (1974): From Kinship to Mastery, Report to Fish & Wildlife Serv. U.S.D.I, p.1-216

Harr C. Zinn, Michael J. Manfredo, Jerry J. Vaske & Karin Wittmann (1997) Society & Natural Resources, 649-662